

---

# ご近所付き合い

文屋カノン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ご近所付き合い

### 【Nコード】

N5574T

### 【作者名】

文屋カノン

### 【あらすじ】

乳飲み子を置いて、嫁ぎ先を追い出された世理子は、身を落ち着けた実家で、隣の家にはライラックの花が咲いていることに気付く。気のせいかその花は、置いてきた娘の体臭に似ている。

胸が張って辛い世理子は、こっそりとライラックの花に母乳をふりかけ、娘に授乳している気分を味わおうとするが、その姿を隣家のご主人に目撃されてしまう。

(前書き)

ふしだらなご近所付き合いを書いてみたかったです。でも第5回小説宝石新人賞で落選しちゃいました。

内容が生々しいので、上品に仕上げるために敬語をちりばめたんですけど、それがいけなかったのかな！。

ライラックは春に花を咲かせるというのに、寒い地方に適した樹木だという話です。なるほど。こちらは気温が低いせいか、お隣の庭のライラックの木にも美しい紫色の花が咲き誇っています。紫は不吉な色と聞きますが、聖書には、高貴な身分の方だけがまとうことを許された色との記述があります。

そのせいでしょうか。あの花にはなぜか心惹かれます。それに今更、不吉を避けたところで、この身にどんな幸運が訪れるのでしょうか。わたくしは嫁ぎ先を追われた身なのです。乳飲み子をあちらに残したまま。

妻の妊娠中というものは、夫が最も、浮気をし易い時期だそうです。わたくしの夫の邦彦も、わたくしの初めての妊娠中に会社の部下の女性と深い仲になりました。出産直前になって、その事実を知ったわたくしは、娘を産んだ後ひどい虚脱感に襲われました。

わたくしは娘のおむつを、一度も替えたことがございません。同居していた姑が

「リラがお乳を欲しがっている」

とわたくしの元へ娘を連れて来た時に、機械的に乳房を、娘にふくませていただけです。

あとは娘が泣こうが喚こうが、娘の顔を、見ようとさえしませんでした。わたくしはそんな生活を二ヶ月以上送りました。娘に対する愛情が湧かなかったからです。

娘に罪が無いことは分かっております。娘の半分が、わたくしを裏切った邦彦の遺伝子によって、形成されているという事実。そんなものが、娘の意図したものではありません。理解できなかつた訳ではありません。

けれど頭で、いくら納得したところで、わたくしは全てが億劫でした。食事とトイレ以外には、ベッドに身を横たえていることしか

できなかったのです。

大体リラという名も、わたくしの気に添いませんでした。日本語には漢字という、意味を持った言葉があるのです。それなのにカタカナだけで名づけるなんて、まず耳障りのよい音を選び、その音を持った漢字を、ケイタイで検索する昨今の若夫婦のようで軽薄です。

もつとも邦彦と姑は、リラの字に漢字を充てませんでした。さすれば意味も分ならず、適当な漢字を充てる、いい歳をしたヤンキーのような人々よりは、潔いかも知れません。そうはいつでも一体リラなどというカタカナに、何の願いが込められているでしょう。

わたくしには当然、リラの名前の由来を、尋ねる権利がありました。ですがその権利を行使致しませんでした。そうすることが何やらひどく面倒臭かったのです。わたくしの気に染まないとはいえ、別におかしな名前でもありません。ですからそんなことなど、どうでもよいことにも思えました。

あの頃わたくしにとっては、この世の全てのこと、どうでもよいことに思えました。だからリラの世話をしないことを理由に、邦彦に離婚を申し渡された時も、そんなことなど、どうでもよいことに思われました。

離婚をしたから迎えに来てくれと、両親に連絡致しますと、彼らは慌てふためいてやって来ました。

そして

「リラのごとは、一体どうするのだ」とか

「そもそもあちらの不倫が原因なのに、なぜ向こうから、離縁を言い渡されるのだ」

などと、様々なことをわたくしに申しました。

けれどももう離婚届は邦彦が提出してありました。そう告げると、両親は邦彦と姑に、慰謝料の請求を致しました。邦彦と姑は余程わたくしに愛想が尽きていたのでしょう。両親の言い値で、慰謝料を現金で渡したようです。

額がいくらだったのかは存じません。わたくしはとにかく、横たわっていることしかできなかったので、わたくしを引き取る両親が納得のいく金額を受け取れるなら、それでよい気が致しました。

ところが、いよいよ嫁ぎ先を後にしようとしたその時、不意にリラが泣き出しました。姑が慣れた仕草で

「おしめかしら」

と立ち上がりました。

それなのになぜかわたくしは、リラがお乳を、欲しがっているような気が致しました。その時わたくしは初めて、自分の意思でリラのベビーベッドに近寄りました。姑を制し、キャラクター入りの布団の下で、泣きじゃくる湿った生き物を抱きかかえた時、何やら甘くよい匂いがしました。

乳房をふくませてやると、その生き物は、懸命にお乳を吸いました。黒々と濡れた瞳がわたくしをじっと見詰めました。その時わたくしは初めて、その生き物を愛しいと感じました。けれど同時に何を今更と思いました。人の心などあてにはならぬものです。

邦彦も永遠の愛をわたくしに誓いました。そして愛の結晶が、わたくしのお腹に宿った途端、他の女性と不倫を致しました。今わたくしに芽生えた母性も、束の間の、気まぐれなものだという気が致しました。

しかし実家に身を落ち着けてみると、なぜかりラのこと、しきりに思い出されました。どうしてリラの世話をしやらなかったのかとわたくしは悔いました。姑は当初、浮気をされたわたくしに同情的だったのです。わたくしがリラの世話さえしていれば、姑は離婚に反対したことでしょう。

もし離婚が、避けられなかったとしても、リラの親権を取ることができたでしょう。でもわたくしは、邦彦の浮気を理由に生まれたばかりのリラの面倒を見なかったのです。わたくしは何て、愚かな女なのでしょう。わたくしを追い出した邦彦は、部下の女性を後妻に迎えるかも知れません。

もしかしたらリラは、継母に育てられるかも知れないのです。その女が、リラを慈しんでくれるでしょうか。もし慈しんでくれたとしても、わたくしのリラを想う気持ちはどうなるのでしょうか。あの子はわたくしの娘なのです。わたくしのただ一人の娘なのです。

「リラを取り返したい」

とわたくしは両親に訴えました。それは即座に却下されました。邦彦と姑が、両親に渡した慰謝料は、リラの親権をあちらに譲ることが、前提のものだったからです。わたくしはまだ二十八歳でしたから、両親はわたくしの再婚も期待していたようです。

「子連れでは、再婚もままならない」

と両親は、わたくしに言い含めました。わたくしは再婚などどうでもよかったのですが、両親はわたくしを、片付けたがっておりませんでした。

いくら相当の慰謝料を頂いたとはいえ、働きもせず、ただだからと、無為の日々を送る娘を、いつまでも養っている訳にはいかないのでしょうか。妊娠した当初は、勤め先に復帰するつもりでしたから育児休暇を取得致しました。とはいえ実家からでは、通勤に片道三時間もかかってしまいます。

両親はおそらく、わたくしより先にこの世を去るでしょう。それまでにわたくしは、新しい働き口を見つけるなり嫁ぐなりして、生活設計を立てねばならないのです。

わたくしはリラを、忘れようと致しました。けれどお乳が張る度に、否が応でも、リラを思い出さない訳には参りませんでした。絞っても絞っても、絞りきれない母乳の感触が胸になごり、わたくしにリラを思い出させます。

誰が教えた訳ではないのに、赤ん坊はどうして、母乳を吸うことができるのでしょうか。リラに授乳していた時には、このような胸のうずきに、悩まされることはありませんでした。リラはよくお乳を飲む健康的な赤ん坊でした。

ふとリラに、お乳を飲んで欲しいと思いました。この胸から湧き

出す白い液体は、他でもないリラのための命の水なのです。生みの母の乳の出が悪い訳でもないのに、ゴムの吸い口の付いた哺乳瓶から、粉ミルクを飲まされているだろうリラが哀れでした。

実家に帰った一週間後に、わたくしは縁側に座りながら、お隣のライラツクの木に咲き乱れる、紫色の花を眺めておりました。

嫁ぎ先にいた時は、リラを可愛いと思えませんでした。一日のほとんどもを、ベッドに臥せて過ごしておりました。それなのに実家に帰った途端、わたくしはリラを思慕致しました。こうしてパジャマから衣服に着替え、縁側に腰かけることも、できるようになりました。何ともげんきなものです。

不吉で高貴な紫色の花に、わたくしは魅せられました。嫁ぎ先を出た途端、わたくしはリラを懐かしみ、お隣のライラツクの花まで愛でるようになりました。自分が少しずつ、正常に近づいていることを知りました。けれど今となつては遅すぎるのです。

しかしながら、リラの件とは別に、自分がライラツクの花に興味を覚えたことを、わたくしは嬉しく感じておりました。一生を両親の元で、怠惰に暮らす訳には参りません。わたくしは自分の人生設計を立てねばならないのです。そのためには、何かに関心を持つきっかけが必要なことを、わたくしは承知しておりました。

わたくしの眼を紫色に染めるその花が、もしきっかけになれば、それはわたくしの慰めになるのです。わたくしはその花を、もつと間近で観察したくなりました。とはいえそれは無理な相談でした。ライラツクの木を所有するお隣の家は、わたくしが嫁いだ間に、持ち主が替わっていたからです。

母が言うには、この不況で、売りに出されたそのお宅を買い取つたのは、大浦さんというご夫婦だそうです。以前お住まいだった海沼のおばさまには、わたくしも子供の頃から、よくして頂いた記憶がございます。しかし大浦さんとは、ご近所付き合いもほとんど無いという話でした。

両親はわたくしが出戻ったことを、周囲に伏せておりました。わ



たくしもお付き合いが無いという大浦さんのお宅に、挨拶に伺うつもりはございませんでした。

小さい時分から、何かと気にかけて下さった海沼のおばさまになら、わたくしも出戻ったことを報告できます。でも見知らぬ大浦さんというご夫婦に

「ライラックの花を、見せて下さい」

などと言えるはずがありません。わたくしは仕方なく諦めました。ところが、縁側で長いこと、大浦さんのお宅の庭を観察していたわたくしが気になったのでしようか。

背後で母が、洗濯物を畳みながら

「大浦さんのお宅は、どうやら共働きみたいね」

とわたくしの気を、引き立てようとしてもするかのようになり、申しました。それなら留守中に庭に忍び込んだらどうだろうと、わたくしはふと考えました。

両親はわたくしが、近所を出歩くことを嫌がります。ならば両親と大浦さん夫妻の留守にでも、ひとつライラックの花を、眺めてやれと思ったのです。父は会社員ですが、母は専業主婦をしているため、なかなか抜け出すチャンスはございませんでした。しかしある夕暮れ時に、母が夕飯の買物に出かけました。

わたくしはそれを潮に家を抜け出しました。夕陽が山の彼方に、吸い尽くされようとしていた頃合でした。辺りにはまだかすかに、光の残骸が漂っておりまして。大浦さんのお宅の庭を覗き込むと、屋根だけのガレージの下は、轍が幾重にも刻み込まれた堅い土が、むき出しになっていました。

どうやらお留守のようでしたが、門扉は開かれたままでした。わたくしは何やら、招かれた客のような気分になって、ライラックの木の前に立ちました。紫色の小花は卵型の葉と共に枝に宿り、芳香を放っていました。その匂いを嗅いだ時、わたくしはリラの体臭を思い起こしました。

わたくしがこの花に心奪われたのは、風に乗ってやって来た、こ

の花の香りが、リラの匂いを、連想させたからかも知れないという気が致しました。頭上で巢に帰る鳥たちの鳴き声が聞こえました。その声がなぜか、お乳を欲しがらるリラの泣き声のように、わたくしの鼓膜に響きました。

おむつ一つ替えたことは無かったけれど、お乳だけは欠かさず、与えていたわたくしです。その時わたくしは、両胸のしこりに気付きました。授乳間隔が空くと乳房にしこりができ易いのです。とはいえわたくしは、出戻って以来、自分の手でお乳を搾り出しておりました。

しかしやはり、赤ん坊に実際に飲んでもらわなくては、なかなか胸がすつきり致しません。わたくしは思わず、シャツのボタンを外すと、花の上に母乳を注ぎました。リラにお乳を与えているような気分になりました。不意に鼻の奥がつんと痛くなり、乳首だけなく眼までが、体液を放ちそうになりました。

その時突然、庭に白い車が進入して来ました。わたくしは慌てて乳房をしまいながら、運転席の男の人を見やりました。目が合ってしまったいました。大浦さんのご主人に違いありません。わたくしは庭を飛び出すと、一目散に実家に逃げ帰りました。しかし玄関のドアを閉めた途端、自分のうかつさに思い当たりました。

まっすぐ家に逃げ帰ってしまったては、自分が何者なのか、自白したも同然です。いくら両親が伏せているとはいえ、わたくしが出戻ったことは、その内ご近所に知られてしまうでしょう。その出戻り娘は、こともあろうに、お隣の庭で乳房を出し花に母乳をかけていたのです。

「菊島きくしまの家には、頭のおかしいバツイチ娘がいる」

と、ご近所の噂になるのは時間の問題でしょう。わたくしは両親に対し申し訳なく思いました。

その夜は、なかなか寝つくことができませんでした。大浦さんのご主人は、わたくしの顔を記憶しただろうか、わたくしの乳房を見ただろうかと考えると、顔から火が出るような、恥ずかしさに駆ら

れます。目を閉じると、大浦さんのご主人の驚いたような表情が浮かびました。

その顔が、まぶたの裏に焼きついて消えません。垣間見ただけでしたが、精悍な顔立ちでした。面長な顔にはめ込まれた二つの鋭い目が、数時間前にシャツの間から覗かせたわたくしの左の乳房に、今も尚、視線を投げ続けているような気が致しました。左の乳房だけがやけに、熱を孕んでいるように感じられます。

リラを胎内に宿して以来、お乳の張りは何度も経験致しました。けれどこのように、胸がうずくように火照るのは、久し振りのことです。あれはまだ身ごもったことに気付いていなかった初期の頃、ベッドの中で邦彦が、最後に手を伸ばしてきたあの晩以来の感覚。

いいえ。あの頃わたくしの乳房には、まだリラのための命の水は宿っておりませんでした。暗がりの中で邦彦は、わたくしのパジャマの下に、女泣かせの長い薬指を滑らせ、わたくしの乳房を愛撫致しました。

確かにその時わたくしは、自分の興奮が、乳房から全身に広がっていくような、情欲のうねりを感じました。けれどこのように左胸だけが、行き場の無い、うずくような火照りを持って余したことは初めてです。わたくしはリラにお乳を飲んで欲しいと思いました。同時に邦彦に、抱かれなくなりました。

考えてみれば、妊娠が明らかになってから、邦彦は一度もわたくしを求めませんでした。つまりわたくしはかれこれ十ヶ月以上、性行為をしていないのです。

妊娠中でも性行為は可能だという話です。それなのに邦彦が

「無茶はしたくない」

と言うものですから、わたくしもその提案を受け入れたのです。

わたくしの友人には、妊娠によるホルモンバランスの変化によって、それまでは淡泊だったというのに、すっかり好色になった者がおります。彼女は嫌がるご主人を每晚押し倒していたそうですが、わたくしはホルモンバランスの変化が、逆に作用したようです。

妊娠発覚以来、わたくしは全く性欲が無くなっておりました。ですから出産まで夫婦生活を控えるという邦彦の提案は、ありがたくもありました。わたくしは自分の都合だけを考えました。正常な成人男性である邦彦が、半年以上に渡る禁欲生活を決意したことに、不審を覚えませんでした。

邦彦が不倫をしたのは、なぜだったのでしょうか。本気でお腹の子の安否を気遣い、肉欲を抑え込もうと試みたものの、耐え切れず他の女性と、関係してしまっただのでしょうか。それとも情事を厭うようになった、わたくしの本心に気付き、よそへ欲望を向けたのでしょうか。

あるいは単純に、孕んだことにより、腹がふくれ体のむくんだわたくしに女を感じなくなっただのでしょうか。もしくは邦彦は、わたくしの妊娠前から不倫相手と関係があり、わたくしの妊娠を、言い訳に使ったのでしょうか。

今こんなことをぐずぐずと考えるくらいなら、離婚する前に、邦彦を問い詰めればよかったです。それなのにわたくしは、あの時は邦彦の動機に、あまり関心がございませんでした。妊娠中に不倫が発覚したため、世の夫が最も浮気をし易いのは、妻の妊娠中だという話を思い出し、一般論で理解したつもりでいたのです。

あの時わたくしは、出産間近でした。わたくしは不倫発覚のショックを引きずったまま、初めてのお産をすることが、恐ろしかったのです。だから邦彦の不倫問題に、さっさと答えを出してしまいたかったのです。

でも今思えば、あの時わたくしが邦彦を追及しなかったのは、性欲が消えていたことが一因だったかも知れません。腹に子を宿し、腹の子の父に劣情を掻き立てられなかったあの時、邦彦はわたくしにとって、男ではなかったのかも知れません。

邦彦はあの時は、

「離婚するつもりは無い」

と申しております。腹の子の父が、父親としての役割を果たし

てくれるなら、それでよいような気が致しました。あの時点ではわたくしは、子供を第一に考えていたのです。

だから邦彦の不倫相手が、邦彦とのあれやこれやを、電話で打ち明けてきた時に感じた喪失感を、振り払おうと致しました。電話があつたことを告げた途端、呆気無く白状した邦彦を、許そうと致しました。

邦彦はあの時は、不倫相手と別れると約束致しました。わたくしと結婚生活を続けることを、望んでおりました。ですからわたくしが何事もなかったかのように振る舞いさえすれば、わたくしが普通の母親のように、リラの世話をすれば、家庭生活が維持できることは分かっておりました。

しかしわたくしは氣力が湧きませんでした。あの頃わたくしは、歯磨き一つするのに勇氣が必要なほど、何もかもが億劫でした。あの状態でリラの面倒を見るなど、考えられないほどの苦行でした。

本当は邦彦を問い詰め、泣き叫ぶべきだったのでしよう。邦彦の口から、百も二百も謝罪の言葉を並べ立てさせ、「愛している」と言わせるべきでした。わたくしたちは男と女であるべきでした。男と女という前提があつてこそ、わたくしたちは、父と母になれたのでしょうか。

その前提をすっ飛ばし、とにかく早いところ、母親になろうと焦った挙句、わたくしはとうとう、母親になることができませんでした。わたくしはリラにとって、ただのミルクタンクに過ぎませんでした。

どうしてこんな簡単なことに、今まで気付けなかったのでしょうか。もっと早く気付いていれば、わたくしは邦彦と、別れずに済んだかも知れないのです。リラを手放さずに済んだかも知れないのです。

里帰り出産をしなかったことが、原因でしょうか。実家に帰った途端、リラを恋しく思いライラックの花に心洗われたのですから、最初から実家近くの病院で、リラを産むべきだったのでしようか。

あるいはリラを産んだ後、リラの世話どころか、自分の身の回り

のことも、満足にできなかった時点で一旦、帰郷するべきだったのでしょうか。そうしなかつたのは、初孫の誕生を心待ちにしていた姑への遠慮があつたからです。わたくしの懐妊が分かつた途端、姑は妊婦向きの料理を、次々とこしらえてくれました。

姑が世話好きな性格であることは、存じておりました。ですからわたくしは、出産を嫁ぎ先で行なうことで、姑を喜ばせたかつたのです。とはいえどんなによい人であつても所詮、姑は姑です。

邦彦の不倫が発覚した際、わたくしは姑と生活することを、息苦しく感じました。仕事はすでに産休に入つておりました。そのためわたくしはほぼ毎日、家で姑と共に過ごしていたのです。身重の体で、夫に裏切られたわたくしが、裏切り者の母親と過ごす時間は辛いものでした。

姑から腫れ物に触るような扱いを受けていたら、本当にわたくし自身が、腫れ物になつたような心地になりました。その時わたくしは、懐妊中の上に不貞を働かれたという、二重の意味で取り扱いが難しい存在でした。そんなわたくしのことを、姑は実は疎んでいるのではないかという気も致しました。

そのくせわたくしは、姑に心から憐れまされたいとは、願えなかつたのです。

わたくしは邦彦に対し、表面上はわたくしより姑を、優先して欲しいと願つておりました。息子が嫁よりも母親に配慮をすれば、彼女はご機嫌でしょうから、わたくしにとって都合がよいからです。

けれど息子が浮気しても、姑の機嫌が、よくなる訳ではありません。そんなことで機嫌がよくなるような女は、性根が曲がついてます。その点、姑は基本的に善良な女です。おそらく邦彦に不誠実な行動を取られたわたくしのことを、気の毒に思つていたでしょう。でもそう思われることは、女としてのプライドが、傷付く気が致しました。

女友達になら洗いざらいぶちまけることができます。邦彦によつてどれだけ自分が傷付けられたかは、しかし姑に対して、わたくし

は弱みを見せられませんでした。姑の機嫌を取るために、表面上はわたくしより姑を大切にしてくれるよう頼んだわたくしの要請を、邦彦が実践していたからです。

つまり姑は嫁ぎ先で、わたくしより上に君臨しておりました。しかもそれは、わたくしの小細工によるものでした。いわばわたくしは、自分に罾を仕掛けていたようなものです。自分の小賢しい企みによって、自分の地位を貶めていたわたくしにとっては、本当の危機に陥った際、姑に同情されることが惨めだったのです。

だからわたくしは姑の前で気丈に振る舞いました。その頃、わたくしのお腹はいよいよせり出して、日常生活も不便でした。そんな状態で、一日の大半を演技で過ごすのは苦痛でした。けれどわたくしの努力が実り、嫁は息子の浮気など、たいして気にしていないようだと、姑に思わせることができました。

とはいえ考えようによっては、わたくしは可愛くない嫁として、姑の目に映ったかも知れません。仮に姑が、そんな目でわたくしを見ていなかったとしても、わたくしは邦彦の浮気に、たいした悲しみを、覚えなかったということになっていたのです。そうすると邦彦の浮気とわたくしの育児放棄は、姑の中でつながらないのです。

そしてそれは、邦彦にとっても同じことでした。だからこそわたくしは、たかだか三ヶ月弱リラの世話を怠ったくらいで、三行半を突きつけられたともいえます。母親が乳飲み子の世話をしないのは確かに問題でしょうが、嫁ぎ先には世話好きな姑がいたのです。

不倫の引け目を、彼らをもつと感じていたならば、わたくしはこんなにも早く、実家に返されたりはしなかったでしょう。今考えてみると、わたくしは邦彦の不倫が発覚した際に、騒ぎ立てるべきでした。事を荒立てまいと平然と振る舞った結果、離婚という形で事を荒立ててしまったのです。

わたくしは邦彦の浮気に、動転したが故に、かえって適切な振る舞いができませんでした。それは仕方ないことだったかも知れませんが、けれどそれならば、出産後リラの世話ができなかった時点でわ

たくしは実家に帰るべきでした。

出産後に赤ん坊を連れて、嫁が帰省するのは、珍しいことではありません。またあの時点では、産後の肥立ちが悪いという言い訳ができました。

息子が離婚し、孫を母無し子にするくらいなら、わたくしがリラを連れてしばらく嫁ぎ先を空けたとしても、世話好きの姑が、生まれたての孫の世話ができなかったとしても、姑にとっては、その方が、よかったのではなかったのでしょうか。わたくしは姑を思いやったつもりで、かえって彼女を傷つけたのではないのでしょうか。

いいえ。やはりそれは違うかも知れません。わたくしはリラと離れたからこそ、リラを愛することが、できるようになったのかも知れません。

もつと早くこちらに戻っていたら、ライラックの木には、春の訪れを告げる愛らしい小花の代わりに、骨の髄を突き刺すように冷たい雪が、積もっていたことでしょう。わたくしがこの事実に気付くには、リラとの離別とライラックの花との出会いが、必要だったのかも知れないのです。

いいえ。いいえ。わたくしは肝心なことから逃げようとしておりません。きっかけはもう一つあったではありませんか。

ライラックの木の前で、左の乳房を出し、白い母乳を紫色の小花に降り注いでいたわたくしの姿を、大浦さんのご主人に、見られたことを忘れる訳には参りません。その事実があったからこそ、わたくしの左の乳房は今こうして熱を帯び、リラだけでなく、邦彦まで求めるようになったのです。

よそのご主人に、あんな姿を見られたことによって、邦彦への愛しさを想起するとは、わたくしは何て不潔なのでしょう。しかもその愛しさは、邦彦への劣情が引き金になったのです。

わたくしは子を持つ母親です。それなのにすでに生まれた子のためではなく、次なる子作りへの本能によって邦彦を求めたのです。わたくしは何て、無責任な女なのでしょう。これでは子供を産み落



とす端からネグレクトをし、次なる種付けだけには熱心な、狂った女ではありませんか。

左の乳房の火照りに誘発されたかのように、右の乳房まで、張ってきたような感じが致します。乳飲み子を持った母親にとっては、神聖であるはずの自分の両の乳房が、このうずきが、忌まわしいものに思えて仕方ありません。

そういえば母乳は、母親の血液によってつくられると聞きます。そう考えるとわたくしのこの性的な煩悶は、血の気の多さが、原因のような気も致します。ああわたくしの体内には、何と厭わしい血潮が流れているでしょう。出血したいと願います。わたくしにはもう一年以上、月のものがございません。

リストカットというものを行なう人々のことが、何やら理解できたような気が致します。世の中には、死ぬ気も無いのに手首にカミソリを当てる人がいると聞きます。今までは不思議だったその行為に納得できたような気が致します。彼らは自分の血液を、疎んじているのでしょうか。わたくしも血を流したくなりました。

けれど当然のことながら、わたくしは即座に、カミソリを探したりせず、寢床でじっとしておりまして。そんな行為はいけないことだと思います。

死ぬ気が無いのなら、自殺には至らないでしょう。それならば手を少し傷つけるくらいのが、どうしていけないことなのかは分かりません。とはいえ少し前まで、わたくしは自傷行為をする人を不気味に思っておりまして。正常な人間から見て、不気味に思える行為を実行することは、やはり抵抗を覚えます。

それなのにわたくしは、自分の体から、血潮を排出させたくてたまりませんでした。そんなことは、思いつかなかったことにしてしまおうと思っても、両の乳房の火照りとうずきは、ますます強まって乳房全体がしびれるようです。

これはわたくしの、精神だけの問題ではございません。ですから気のもちようで、やり過ぎせるものではありません。わたくしの両

の乳房は、切実に何かを求めているのです。

ならばリストカットでなくてもよいのではないかと、わたくしは気付きました。どうやらマスメディアによって、血を流すべき場所は手首だとわたくしは刷り込まれていたようです。わたくしは今、両の乳房を持って余しているのですから、ここからお乳を、搾り出せば済むことです。

わたくしはそつと部屋を抜け出すと、浴室から洗面器を持って参りました。湯に湿った水色の洗面器に、お乳をびゅつと搾り出しました。虚しさがわたくしを支配致しました。

この乳白色の液体は、リラのあの、小さな桃色の口内に入ってこそ命の水になり得るのです。それなのにわたくしは、今それを廃棄しているのです。それにいくら手で絞ったところで、胸のわだかまりが消える訳ではございません。

わたくしは目を閉じて、リラの匂いを思い出そうと致しました。自分の乳房から母乳が放たれる時は、必ずあの子の匂いが、傍らに無ければならないのだと思いました。その時、夕暮れに嗅いだお隣のライラックの花の香りが、わたくしの鼻腔によみがえりました。あの花の側へ行きたくなりました。

もう真夜中ですから、大浦さんご夫妻も、お休みになつていらっしゃいます。先ほどは夕暮れ時に向かったことが失敗だったのです。この不況の最中、定時で帰宅する人は珍しくありません。わたくしはそれを考慮するべきでした。

とはいえまたライラックの花に、お乳をかけるつもりはございません。草木も眠る丑三つ時とはいえ、万一誰かが見ていないとは限らないからです。わたくしはライラックの花に、お乳をやっていた姿を、大浦さんのご主人に見られた可能性がございます。再びそのような姿を誰かに見られることは、得策ではございません。

わたくしはパジャマの上に、カーディガンを羽織ると、そつと部屋を抜け出しました。両親の寝室からは、二つの規則正しいいびきが聞こえて参ります。両親が熟睡していることに安堵しながら、わ

たくしは玄関から外へ、身を滑り出しました。

桜はとうに散ったというのに、やけに肌寒い夜でした。全身を冷たく撫でる夜風に、わたくしは一瞬たじろぎました。ところがその冷気が、かえって熱い両の乳房をわたくしに意識させました。自然が起こす冷やかな空気は、なぜか清浄な気が致します。

ライラックの木の側で、ひんやりとした風に洗われれば、わたくしの穢れも、少しは清められるように思えました。相変わらず開け放たれたままの、大浦さんのお宅の門を抜けると、ライラックの木に向かいながら、わたくしはふと、十歳の頃のことを思い起こしました。

わたくしの今の本当の願いは、再びライラックの花に、わたくしのお乳をあげることです。でも大浦さんのご主人と、遭遇してしまったことによつて、わたくしはただ、ライラックの木の側に立つだけで満足しようと考えました。十歳の頃にも、似たような経験があるのです。

実は今、一緒に暮らしている父は、わたくしの本当の父ではありません。わたくしが十一歳の時に、母は私の実父と別れ三年後に再婚致しました。

子持ちの、もう若くはなかった母をもらつてくれた継父に、わたくしは感謝しております。継父は早くに、奥様と死別したとことで子供が無く、わたくしを可愛がつてくれました。わたくしも継父に懐きました。一方わたくしは実父のことは憎んでおりました。実父は酒乱で、母やわたくしに度々暴力を振るつていたからです。

母はなぜ離婚しないのだろうと、わたくしは常々、疑問を持っておりました。そして十歳になった頃には、実父に殺意を抱き始めました。

布団に入ってから眠りにつくまでの間、毎夜父を殺すことを、想像しておりました。わたくしの想像の中で使われる凶器は、常に包丁でした。わたくしは九歳の頃から、毎晩夕飯の支度を手伝っておりましたので、包丁が馴染み深い道具だったのでしょう。

ある夜、頭の中で行う殺人だけでは物足りなくなり、わたくしは父の寝室へ向かいました。その頃、すでに父母は寝室を分けておりましたから、その部屋で眠るのは父一人でした。わたくしは敢えて手ぶらで父の寝室を訪れました。強い殺意は抱いておりましたが、人を殺すことなど、いけないことだと思っていたからです。

わたくしはただあの時、寝込む父の寝室に忍び込むことにより、自分の気持ちを誤魔化したかったのです。何も知らず、眠りこける父の姿を見て、自分はいつでもこの男を殺すことができるのだと、満足することが目的でした。

ところが寝室のドアを開け、その場に佇んでいると、父が目を見ました。父は不機嫌そうに「何だ？」と尋ねました。その日は珍しく、酒が入っていなかったため、父はすぐに目覚めたようでした。

その声色が大変迷惑そうだったので、わたくしはおびえました。わたくしはすぐさま

「何でもない」

と部屋を出ました。

その頃わたくしは、父に与えられるストレスのせいで、よく夢遊病を起こしておりました。母が言うには、症状の出ている時も、わたくしは大きく目を見開き、はきはきとものをしゃべっていたそうです。そのため夜中にわたくしが歩き回っていても、意識があるのか無いのか、即座には判断しかねたようです。

そんな状況でしたので、わたくしがまた、夢遊病を起こしたとでも父は思ったのでしょうか。翌日になっても、わたくしは昨夜の行動を詮索されませんでした。

あの頃わたくしの殺意は、大変強いものでした。わたくしは殺人によって少年院に送られることを、全く恐れておりませんでした。それなのに父の「何だ？」という冷徹な声に、おののきました。

繰り返しますが、わたくしは父を、殺したいほど憎んでおりました。それでいてこの人は酒さえ飲まなければよい人なのだと、思い

たがっていた節がございました。しかしシラフの父に、冷たくあしらわれました。わたくしは酒の問題以前に、父に愛されていなかったことを悟りました。

その事實は、わたくしにとって非常に怖いことでした。わたくしをこの世に生み出した親の片割れが、わたくしを全く、愛していません。彼が愛していたのは酒だけでした。酒に溺れた彼は、わたくしに手を上げ母を足蹴にしました。そして酒を飲んでいない時すら、優しい言葉の一つかけてくれませんでした。

そんな父と、結婚生活を続ける母のことも、当時は恨んでおりました。娘が父に日常的に暴力を振るわれているというのに、何の手も打とうとしない母も、わたくしを愛していないのではないかと、疑いました。

ある夜、食卓をひっくり返した後、父は外で飲み直すために出て行きました。ぴしゃりという、玄関の引き戸を締める音を聞いた直後、わたくしはずっとこらえていた疑問

「どうしてお父さんと、離婚しないの」

というセリフが、自分の唇から、飛び出してしまったことを知りました。

父が食事を台無しにした時は、母はいつも、夕食代わりに塩むすびを手早くこしらえてくれました。けれどわたくしは、そんな簡素な夕食にはうんざりしておりました。前述した通り、わたくしは毎日、夕食の支度を手伝っていたからです。

我が家の収入の大半は、父の飲み代で消えていました。だから母とわたくしは、少ないお金で知恵を絞って、食事をこさえておりました。けれどどれだけ工夫を凝らして料理をしようとも、酒乱の父は料理を床にぶちまけ、その周りには、割れた食器が散乱するのです。

食べるという、生きるために不可欠な行為を実践するために、なぜそこまで苦勞しなければならぬのか、分かりませんでした。そしてその苦勞が、どうして報われないのかと、わたくしはやりきれ

なさでいっぱいでした。

母は割れた茶碗の破片を拾いながら、しばらく黙っておりました。その茶碗は、父の日にわたくしがプレゼントしたものでした。収入の大半が父の飲み代に変わるこの家で、乏しいお小遣いの中から、やり繰りして買った茶碗です。

そのプレゼントが、忽然と姿を消したことを、父が気にも留めな  
いだろうことは、分かっておりました。例え飲んでいなかったとし  
ても、気にも留めてもらえないだろうことも察しておりました。も  
うこれ以上、見返りの無い愛を父に注ぐことに、わたくしは疲れて  
おりました。

割れた父の茶碗の破片を、母は無表情に拾い集めておりました。  
わたくしが父のために買った茶碗であることに、気付いていたのか  
どうかよく分かりませんでした。それにそんなことは、どうでもよ  
いことに思えました。

例えば母が  
「せっかく世理子<sup>せりこ</sup>が、お父さんのために、買ったお茶碗だったのに  
ね」

などと慰めてくれることも、わたくしは期待していなかったから  
です。その場でそんな慰めを受けることは無意味だからです。

母が帰宅後の父に、茶碗を割ったことを、責めてくれるなら別で  
す。しかしそうはせず取り繕いの言葉だけ吐かれたところで、わた  
くしは苛立ったただけだったでしょう。母はそんなわたくしの心中を  
知ってか知らずにか、ただわたくしに、ゴミ袋を持って来るよう命  
じました。

わたくしは気を利かせて、ゴミ袋の他に、ほうきとちり取りを持  
って荒れた部屋に戻りました。母は破片をゴミ袋に入れながら

「お父さんがいなくなったら、生活が苦しくなるわよ」

とぼそりとつぶやきました。その乾いた目には、父に対する愛情  
は感じられませんでした。

「『生活が苦しくなる』ってどういうこと？ 週に一度のおむすび

が週に二度になるってこと？ 夏用と冬用で、一着ずつしか無いわたしのよそゆきの服を、売る羽目になるってこと？」

「ああ世理子、あなたには苦勞をかけてるって分かってる」

「本当にお父さんがいなくなれば、わたしたちは金銭的に苦勞するの？ この割れた食器の数を見てよ。お父さんがいなくなれば、少なくとも始終食器を買い換える必要は無くなるじゃない。ひっくり返される料理のために、ガス代を使うこともなくなるじゃない」

わたくしの訴えに、母はぼかんとしておりまして。だがしばらくすると

「それもそうね」

と答えました。その時の母の呆然とした横顔を、わたくしは忘れることができません。

その後わたくしの提案を受け、母は離婚を致しました。おかげでわたくしは、父殺しをせずにすみました。

もっとも父の寝室に、忍んで行った際に、父の反応におびえたわたくしは、その後父の寝室を訪れることはございませんでした。ですからもし両親が離別しなくても、わたくしが実際に、父に手をかけたかどうかは定かではありません。

しかしそんなことは、たいした問題ではないのです。肝心なのはわたくしは幼い頃に、代償行為によって、殺意を封じ込めた経験があるということ。そしてその経験があったからこそ、わたくしは今こうして、ライラックの木の側へ向かっているのです。

わたくしの今の本当の願いは、リラにお乳を吸わせることです。しかしそれがかなわないのなら、わたくしはリラの体臭に似た香りを放つライラックの花に、お乳を振り掛けたいと望みます。

とはいえその姿は、大浦さんのご主人に、見つかってしまいました。そこでわたくしは、今度はただライラックの木の側に立つという行為によって、自分の心を慰めようとしております。

これはいわば、代償行為の代償行為といえるでしょう。嫁ぐまでの実家での、継父を交えた平穏な日々満足していたことも、代償

行為だったかも知れませんが、誰でもそうでしょうが、本当はわたくしは実父に愛されたかったのです。でも世の中には、親の再婚相手に虐待される人もいます。

ですからわたくしの、本当の願いなど、わがままというものでしょう。本当はこうして、人目をばかりながらライラックの木の下に立つのではなく、リラにお乳を吸わせたいという、わたくしの願いも、わがままというものかも知れません。

ええそうに決まっています。実の親に愛されない苦しみを、わたくしは痛いほど存じておりました。それなのにわたくしは、こちらに帰って来るまで、リラを愛することができませんでした。母親失格のわたくしには、せいぜい代償行為によって、自分の本能を誤魔化すくらいのことしか、許されなんでしょう。

そのようなことを考えながら、わたくしは大浦さんのお宅のお庭を横切りました。その時……、ああ何ということでしょう。わたくしはまたしても、大浦さんのご主人に直面してしまいました。真夜中だというのに、どういう訳か大浦さんのご主人は、庭を歩いているのです。

夕暮れ時に目が合った際には、慌ててその場を、立ち去ったわたくしです。とはいえ月が闇夜に溶けた新月の暗闇の中で、再び彼の姿を目にしたことに、わたくしは下半身の力が抜けました。わたくしはその場に、立ち尽くしてしまいました。

気が付いた時にはわたくしは、大浦さんのご主人に、右の手首を掴まれておりました。それは骨ばった大きな手でした。

「何を、しているのですか」

と、大浦さんのご主人は、わたくしの手首を掴んだまま案外穏やかな声色で尋ねました。正面玄関に点った電灯が霞む闇の中で、大浦さんのご主人の白目と歯だけが、浮かび上がっているように見えます。

侵入者はわたくしだというのに、いえ自分が侵入者だからこそ、わたくしは捕らえられたことにおびえながら



「申し訳ありません。お庭を散歩しておりました」と答えました。

「夕方も、来ていましたね」

「はい。申し訳ありません」

「木に、何かしていませんでしたか」

ああやはり、見られていたのだと、わたくしは絶望的な気持ちになりました。考えてみれば、夕方に大浦さんのご主人と目が合ってしまったのですから、いくら夜中とはいえ、再びここを訪れたのは愚かなことでした。

十歳の頃、父の寝室へ入った際は、父に「何だ？」と冷たく尋ねられただけです。つかり気分が萎縮して、わたくしは二度と、その場へ向かいませんでした。それなのにどうして今回は、再び足を運んでしまったのでしょうか。

殺人願望よりも母性の方が、抑えられないものなのでしょうか。そんなにわたくしの母性が強いなら、なぜわたくしは、離婚が決まるまで、リラを慈しむことができなかったのでしょうか。

わたくしはすっかり混乱しながら

「ああごめんなさい。わたしは情緒不安定なんです。勝手によそさまのお宅のお庭に入り込むことが、いけないことだとは分かっておりましたが、わたしは別に悪さをするつもりではなかったんです」とまくし立てました。

「情緒不安定。鬱病か何かですか」

「病院を受診しておりませんから、分かりません。でもそう言われてみれば、思い当たる節はございます。今夜もなかなか寝つけなかったものですから、ついこちらに足を運んでしまいました」

「二度までもうちの庭にいらしたのには、理由があるんですか」

問い詰めているはずの大浦さんのご主人が、なぜか尊敬語を使つたために、わたくしは思わず顔がほころんでしまいました。けれど当然のことながら、それはこの場にそぐわない表情でした。

大浦さんのご主人は、警戒したような顔つきになりました。そして

「ここは、寒い」

とつぶやくようにおっしゃいました。

そうおっしゃられてみれば、散々夜風になぶられたわたくしの体は、芯から冷え切っております。今わたくしの体でぬくもっていないのは、大浦さんのご主人に掴まれたままの右手首だけです。

わたくしがうなずくと、大浦さんのご主人は

「中に入って、話を聞かせて下さい」

と玄関を指しました。

わたくしはパジャマにカーディガンを羽織っただけの姿でした。

このような格好で、照明の点る家の中に導かれることに、抵抗を覚えませんでした。かといってここで立ち話を続けて、大浦さんのご主人がお風邪などを召されたら、責任を感じます。

わたくしは仕方なく、大浦さんのご主人に手を引かれて、大浦さんのお宅に入りました。ドアを開けて、靴脱ぎ場の照明を点しながら、大浦さんのご主人は、ようやくわたくしの右手首から手を放しました。わたくしは解放されたような見捨てられたような気分です、陰鬱に伸びる長い廊下を眺めました。

海沼のおばさまたちが、住んでいらした時には、こちらは明るなお宅といった印象でした。年月がこのお宅を、すすけさせてしまったのでしょうか。それともわたくしのやましさか、この場を重苦しいものを感じさせるのでしょうか。

大浦さんのご主人が、ドアを後ろ手に閉めた時、ぷんとライラックの花の香りを感じました。そういえば、庭にいた時には気付かなかったというのに、家の中に入った途端、あの花の香りが漂っているとはどういう訳でしょう。こんな底冷えする夜に、窓が開いているとは思えません。

わたくしは不思議に思いながら、わたくしを先導する大浦さんのご主人の背中を見詰めました。夕方、車中のお姿を拝見した折にはスーツ姿でしたが、照明の下で歩く彼は、スウェットの上下をお召しでした。おそらくそれが寝巻きなのでしょう。

海沼のおばさまたちが、客間として使っていた部屋に、わたくしは通されました。確か和風のお座敷でしたのに、畳の上にはウッドカーペットが敷かれておりました。一見すると、洋室のようですが、洋室には似つかわしくない床の間が、何とも珍奇な印象を醸しています。

襖を取り払いアコーディオンカーテンが垂れ下がっているのも、何やら奇妙な雰囲気でした。これは大浦さんのご主人のご趣味なのでしょう。それとも奥様のセンスなのでしょう。

そこまで考えた時、わたくしははっと致しました。奥様はおそらく、二階でお休みになっただろうしやるでしょう。それなのに階下で、わたくしたちが話をしていたら、お目覚めになってしまうかも知れません。いえもしかしたら玄関のドアを開けた音で、奥様はすでに、起きていらっしやるかも知れないのです。

もし奥様が、降りていらしたらどうしようと、わたくしは心配になりました。洗いざらした髪を垂らし、パジャマをまとった女をご主人が連れ込んでいるのをご覧になったら、奥様に誤解されかねません。

わたくしが気を揉んでおりますと、大浦さんのご主人は、わたくしに椅子に座るよう促しました。わたくしは腰を下ろす気になれず

「奥様は、どちらにいらっしやるんですか」と尋ねました。

「妻は今、実家に帰っています」

そう答えると、大浦さんのご主人は、そのまま客間を出て行かれました。

奥様が家を空けていると分かり、わたくしは少し安堵して、椅子に腰掛けました。ほどなくして大浦さんのご主人が、ビールを二缶持って現れました。

侵入者であるわたくしに、お酒が振る舞われるとは思ってもみませんでしたので、わたくしは驚いて

「こんな時間にお酒を召し上がって、明日のお仕事に、差し支えな

いんですか」

と尋ねました。しかもこの不況の折に、第二、第三のビールではなく、本物のビールを出すご主人は太っ腹です。

「こんな時間にこんな気分でしたら、眠れやしないんだから、どのみち仕事には差し支えますよ。それともあなたは、ビールは嫌いですか」

「嫌いではありません。それに出して頂いたお飲み物に、注文をつけられる立場ではございませんし」

「……あなたは、よく分からない人だ」

困惑したような大浦さんのご主人の顔を、わたくしは見詰めました。彼は缶ビールのプルトップを開けると

「あんな突拍子も無いことをしていた割には、話し方もしつかりしているし、気がふれているようにも思えない。でもまともな女性だったら、情緒が不安定になったくらいで、リラの木の前で胸をはだけたりするものですかね？」

と少し怒ったような口調で尋ねました。

その時当然のことながら、わたくしには質問内容よりも、気になるワードがございました。わたくしは弾かれたように

「リラの木？ あれはライラックじゃないんですか」

と早口で尋ねました。

「ライラックは英語名ですよ。リラはフランス名。日本ではムラサキハシドイと呼ぶらしいけど、まあ長すぎますからね」

詳しい割にはどうでもよさそうな口調で、大浦さんのご主人は、説明しました。後でムラサキハシドイは、紫丁香里花と書くのだと知りましたけれど、あの木の和名など、その時のわたくしにとってはどうでもよいことでした。

わたくしは大浦さんのご主人につられて、プルトップを開けた缶ビールに、しばし目を落としました。

思えば胎児によくはないからと、わたくしは夫と籍を入れてから、アルコールをほとんど、摂取しておりませんでした。避妊はしており

ませんでしたし、妊娠発覚後に断酒するより、受胎時に母体が酔っていないことの方が大切だと、聞いていたからです。

無論、出産後も母乳に悪影響が出るという理由で、わたくしは断酒を続けておりました。しかしそれならば離婚後、帰省した後には飲酒しても構わなかったはずです。しかしわたくしは、酒を飲みませんでした。心が折れていたからこそ、そのような時に酒に手を出し、実父のように依存症になることを警戒したからです。

そういつた訳で、長いこと断酒をしていたわたくしは、飲酒という娯楽が、この世にあることを忘れようとしておりました。そんな中、思わぬ場所で再会した缶の中に沈む琥珀色の液体に、わたくしは懐かしい優しさを感じました。わたくしはあまり、酒に強くありません。だからこそその分、酒ですぐ陽気になる性質です。

わたくしはビールをぐびりと飲み下しました。舌と喉と食道が、心地好い熱さを覚えました。わたくしはその感覚に酔いながら

「わたしの娘の名前は、リラというんです」

と打ち明けました。久し振りのアルコールがたった一口で、わたくしの舌を滑らかに致しました。

「お子さんがいたんですか」

「今わたしの手元にはおりません。わたしは夫に、離婚されたばかりなんです。わたしはお隣の菊島家の娘です。先日、実家に帰って参りまして、大浦さんのお庭を拝見しました時に、ライラックの木の花に、なぜか心惹かれまして、ついお庭に入ってしまったんです。ただその時は花を近くで拝見するだけのつもりでありました。

わたしはライラックのフランス名が、リラだということも存じていなかったんですもの。それなのに木に近づいたら、花の香りが娘を思い起こさせたんです。娘はまだ生後三ヶ月です。わたしは胸が張っておりまして、その花が何やら娘のような気がして、つい花に母乳をかけてしまいました。その時、大浦さんがお車で帰っていらしたので、わたしはびっくりして逃げ帰ってしまっただんですが、なかなか寝付くことができなくて、ついまた、こちらに来てしまっただん

です」

気が付くと、わたくしの両の目からは涙が溢れておりました。子供の頃ならいざ知らず、会ったばかりの人の前で、泣いたのは初めてのことでした。わたくしは何やら新鮮な気分になりました。

泣くという行為は、辛いことがあった際に、気分転換のために脳に命じられて、行なわれるという話です。確かにわたくしの苦悩の一部が、はらはらと頬を伝っていったような、清々しい気分になりました。体液を流すということは、ひよっとしたら人間の本能なのかも知れません。

人間の三大欲求は食欲、睡眠欲、排泄欲だということです。さしずめ涙を流すのは、排泄欲でしょうか。わたくしがさきほどベッドの中で出血を望んだのも、排泄欲だったのかも知れません。そしてわたくしが両の乳房から、お乳を出したいと願ったことも。

音も無く頬を濡らす、透明の排泄物に、わたくしは心身を委ねました。すると大浦さんのご主人が、ティッシュボックスをわたくしに差し出しながら

「男の僕が言うのも何ですが、あなた……、菊島さんの母性は理解できますよ」

と微笑みました。

大浦さんのご主人が、初めて笑顔を見せて下さったので、わたくしは嬉しく感じました。けれどわたくしは、大浦さんのご主人の言葉に微妙なズレを感じました。ただ真実はどうあれ、この場では共感して頂くことに、越したことはありません。わたくしは黙ってティッシュを受け取りました。

「でもあの木が、お嬢さんの名前と同じだろうと、お嬢さんの匂いに似ていようと、植物に母乳をかけたところで、解決にはならないでしょう」

「おっしゃる通りです。でも親権を、あちらに取られてしまったので、わたしの娘への想いは誤魔化すしか術が無いんです」

「どうせなら植物ではなく、赤ん坊に母乳をやってみませんか」

その意外な提案に、わたくしはティッシュで拭っていた目を見開きました。今時、乳母の働き口などあるはずがございません。すると大浦さんのご主人は

「うちに五ヶ月の娘がいます。娘に母乳をやってもらえませんか」と静かな口調でおっしゃいました。わたくしはようやく、家の中に漂う、ライラックのような香りを理解致しました。

「奥様は、お乳の出がお悪いのですか」

「さつき妻は帰省中だと言いましたが、実は僕と娘は、妻に捨てられたんですよ」

「じゃあお嬢さんのお世話は、ご主人が？」

生後五ヶ月の乳飲み子を置いて、奥様が家を出てしまったのかと驚嘆しながら、わたくしは尋ねました。母の話では大浦さんのお宅は共働きだということでした。でもそれは、引越して来た際にいらしたはずの奥様の姿が見えなくなったので、母は勝手に、共働きだと考えたのかも知れません。

あるいは出産後に奥様は、実際にお仕事に復帰され、その後出奔してしまったのかも知れません。お付き合いが無いと、隣家のことでもなかなか分からないものです。

「近所付き合いという言葉は、本当に死語になってしまったのだなとわたくしが実感しておりますと、大浦さんのご主人が

「もう主人ではありません。妻は署名捺印した離婚届を置いて行きましたし、それはもう提出済みですから僕は独身に戻りました」

と悲しげにおっしゃいました。が、すぐさま「いやでも世帯主という考え方なら、僕はまだ、この家の主人なのかな」

と付け足しました。

どうやらこの方は、言葉に対して真面目なようです。どちらの解釈が正しいのかは、わたくしにも分かりません。とはいえ離婚なされた以上、こちらのお宅で大浦姓を持つていらっしゃるのは、この方とお嬢さんだけです。

赤ん坊を大浦さんと呼ぶのはおかしな話ですので、わたくしはこれからこの方を、大浦さんと呼ぶことに致します。

ムラサキハシドイよりもライラックよりも、リラの方が短いからと、あの木をリラと呼ぶ大浦さんの流儀に習うかのように、わたくしは大浦さんの呼称を、胸の内ですべて決定致しました。

すると大浦さんは

「勤務中は保育園に預けていますが、仕事が終わってからは、娘の世話は僕がしています。男親ですから、何かと行き届かないことが多いですが、別に菊島さんに、娘の世話を押し付けようというんじゃないんです。単純に胸が張って辛いなら、うちの娘に母乳をやってくれないかと思っただけです。他人の子供じゃ、お嬢さんの代わりにはならないだろうけど、植物に母乳をやるよりは、マシじゃないかと」

と、なぜかやましそうに目を伏せました。

一理あるとわたくしは考えました。母乳などかけられては、花だって迷惑でしょう。木の持ち主である大浦さんにも、ご迷惑でしょう。他人の母乳とはいえ、粉ミルクを飲むよりは本物の方がお嬢さんの健康にもいいでしょう。わたくしも胸の張りが無くなれば助かります。

けれどわたくしは、「考えさせて頂けませんか」と、返事を致しました。ビールには半分ほど口をつけただけでしたが、わたくしは久しぶりのお酒に、少しくらくらしておりました。それに大事な話というものは、夕方以降に決定してはいけません。

人間の脳は、夕方には鈍くなりますから、セールスマンは夕方以降に、契約を結ばせようとするものだと、何かで読んだことがあります。しかも今は夜中です。何かを決定してはならない時なので

す。

それでも男性と寝るか寝ないかという選択は、社会通例上、黄昏時を迎えてから、決定せねばならない場合がしばしばです。ですから女とは、誠に厄介な性だと言わざるを得ません。しかし今回の提



案に関しては、幸運なことに決定を引き延ばすことが可能です。

大浦さんは「構いませんよ」と答えると、引き出しからメモ用紙を取り出しました。そしてケイタイナンバーとメールアドレスを、さらさらと書き込むと

「いつでも、連絡して下さい」と差し出しました。

わたくしがその紙切れを受け取ると、大浦さんは

「お宅まで、送りましたよ」

と提案して下さいました。けれどわたくしは

「お隣ですし、もし父母に気付かれたら面倒ですから」

とお断りして、大浦さんのお宅を失礼致しました。

辺りにはまだ、黒々とした闇がはびこっておりました。それなのに大浦さんのお宅で今、乳飲み子が眠っているのだと思うと、不可解なほど温かな気持ちになりました。音を立てないように、そうつと自宅の玄関のドアを開けると、わたくしは自室に引き取って、ベッドに潜り込みました。すぐさま呆れるほどなだらかな睡魔が、わたくしを襲いました。

翌朝、鳴り響く目覚まし時計を止めた時、わたくしはひどい眠気に襲われました。まだ九時になったばかりですから、五時間しか眠っておりません。

目覚まし時計をセットしたのは、出産以来初めてのことでした。新生児は四時間ごとに、母乳を欲しがって泣き喚きます。ですからわたくしは、アラームをセットする必要があるませんでした。そして帰省してからは、体を休めるために、わたくしは好きなだけ惰眠をむさぼっております。

ただ昨夜、なかなか寝付けなかった事実が、わたくしに目覚ましをセットさせたのです。日中は睡魔に襲われるかも知れませんが、さすがベッドの中で、煩悶する時間を考えたら、これくらいのリスクは致し方ないことです。

自室を出、階段を降りると、階下からがたごとと物音が致しまし

た。台所へ入って行くと、台所に連なる居間でスーツケースを開けている母の姿が見えました。わたくしは「おはよう」と声をかけながら、電子ポットの液晶を眺めました。温度は七十五度を指しています。

「おはよう。コーヒー？」

と母が、消えない眉間のしわの混じった微笑で、わたくしに尋ねました。

「今日はインスタントでいい。自分で入れる」

「朝ごはんは？」

「食べる」と返事をしながらわたくしは、ポットの再沸騰ボタンを押ししました。母はスーツケースを放り出すと、トースターに食パンをセットしました。考えてみれば、この家に帰って来てから午前中に目覚めたのは初めてのことでした。

つまりこうして、母に朝食の支度をしてもらうのも、久しぶりのことなのです。わたくしは何やら、新鮮な気分です。コーヒーを入れると、食卓に据えられた椅子に座りました。母はまるで踊るように卵を割り、ポーチドエッグをこしらえています。

娘が離婚されたばかりだというのに、何を浮かれているのでしょうか。先ほどのスーツケースに関係があるのでしょうか。

ガスの火の点いた鍋をかき混ぜながら、母が

「もう困っちゃうわあ。お父さん急に、アメリカに出張だなんて言うんだもん」

と、言葉とは裏腹に全く困っていないさそうな素振りで言いました。「いつから？」

「来週だって。それでね。よかつたら世理子とお母さんも一緒に来ないかって言うんだけど」

なるほど。母がご機嫌な理由は分かりました。わたくしも少し気分が高ぶりました。未知の海外に行くのもよいかも知れません。昨夜の大浦さんの提案も、リラと邦彦へのわたくしの未練も、海外へ行けば忘れてしまえるかも知れません。

しかしもし、アメリカに行っても、リラと邦彦を忘れられなかったら、どうしたらよいのでしょうか。人間にとって異国の土を踏む以上の気分転換など、およそ考えられないというのに、そこまでしても、リラと邦彦を忘れられなかったら、わたくしはどうしたらよいのでしょうか。

いえそもそも、わたくしは忘れてよいのでしょうか。邦彦はともかくリラを忘れてよいのでしょうか。側にいた時に、愛してやれなかった娘を、側にいられなくなったからと、忘れてしまっただけなのでしょうか。

わたくしはリラのことを、片時も忘れず、のた打ち回って苦しむべきではないでしょうか。それがわたくしに課せられた、十字架ではないでしょうか。

「行かないわよ。わたし」

思わず大きな声が出てしまいました。わたくしは自分の声にたじろぎました。わたくしは慌てて

「だってパスポートだって、まだ書き換えてないし」と付け足しました。

離婚届は邦彦に提出してもらいましたが、わたくしは実は、まだ住民票も移動しておりません。

「……そういえばそうね。銀行口座の名義とか、まだ何も手をつけてなかったわね」

「お母さん、ついて行きたいなら行けば」

「そんな、こんな状態の世理子を置いて行けないわよ」

母の口調は明らかに沈んでおりました。母にとっては、初の海外旅行のチャンスだったのです。

「わたしなら、大丈夫よ」

「大丈夫な訳無いじゃない。まだ自分でご飯も作れないのに」

「別にデリバリーサービスくらい、自分で頼めるわよ」

わたくしは段々、苛々して参りました。苦勞続きの母の初の海外旅行の足かせが、他ならぬ自分だという事実に苛立ちました。わた

くしなど、決まりきった出前でも食べていけばよいのです。掃除もできないなら、ホコリだらけの家に住んでいけばよいのです。

それなのに母は

「そんな店屋物ばつかじゃ、体に悪いじゃないの」

と眉間のしわを深めました。わたくしは聞き分けの無い母に、カツと致しました。

「それじゃあ何？ 『食の砂漠』って言われてるアメリカンフードが、わたしの体にいいって言うの？」

「……食の砂漠？」

「ああもうお母さんって何にも知らないのね。手作りなら何でも、体にいいって思ってた訳？ 育ち盛りの子供が毎週毎週、塩だけで握ったおむすび、食べさせられてたつていうのに、それが健康的だとも思ってた訳？ 十歳の子供が実の父親を、毎晩毎晩、ぶつ殺してやるうと思いがら過ぎたことが健全な訳？ 夢遊病でふらふら家の中うろついて、十分な睡眠も取れなくて。ねえ知らないの？ 子供の頃に両親のDV見て育つと、脳の発達に悪影響を及ぼすって、実証されてんのよ。わたしがリラを愛せなかったのはそのせいよ。両親が離婚すると子供も離婚する率が高いのよ。わたしが離婚したのは、お母さんのせいよ！」

突然たけり狂ったわたくしを、母は啞然と眺めておりました。わたくしは自分だけが荒れていることが気に入らず

「何でもっと早く離婚しなかったの？ ねえ何で、もっと早く離婚しなかったのよ。あの酔っ払いに散々虐げられたから、お母さんがいらぬ我慢をする姿を、散々わたしに見せつけたから、わたしも我慢することが、習い性になっちゃったんじゃないの。わたしの小学生的頃からの通知票を思い出してよ。判を押したように、『忍耐強い』『忍耐強い』『忍耐強い』って。わたしはそれをずっと、褒め言葉だと思ってた。おめでたいことにね。お姑さんと同居することになった時も、皆がわたしに言ったわ。『あなたなら辛抱強いから大丈夫』ってね。ええわたしは辛抱したわよ。お姑さんに気を遣

ったわ。そして邦彦に対してもいらぬ我慢をしたわよ。不倫が発覚したのに、わたしは邦彦を一言も責めなかった。類稀なる忍耐強さを持ったお母さんの影響で、わたしは自分が、必要なまでに耐えていたことに気付かなかったのよ。どうしてあんな、無駄な辛抱をする姿をわたしに見せ続けたのよ。どうしてあんな父親の元で、わたしは苦勞しなきゃいけなかったのよ。離婚した両親を持った子供の離婚率が高い事実を、お母さんは一体どう考えてた訳？ その後幸せな再婚をしさえすれば、帳消しになるとでも思ってたの？ 子は親の背を見て育つよ。くだらない我慢を、し続ける姿を見せ続けられた、わたしのデメリットを、一度も考えなかったんじゃないでしょうね？ 自分だけちゃっかり再婚して幸せになって、娘にこんな思いを抱かせてどういうつもり？ ああそれとも、コブ付きで再婚した引け目から、お義父さんにも未だに遠慮していらっしやる？ でも言つときますけどわたしだって、お義父さんには気を遣ったのよ。ええ今だって遣ってるわ。そりゃあ最初の父親よりはマシな人かも知れないけど、わたしはあの人と、血が繋がってないんですからね。体で繋がってるお母さんには、分かりやしないかも知れないけど」

と怒鳴り散らしました。

最初の父がいくら暴れても、母はいつも冷静でした。再婚後はその冷静さにほどよい微笑が加わりました。その母の心を、わたくしはかき乱したかったのです。わたくしは本当は、荒ぶる心を素直に表現した実父よりも、どんな時でも冷静さを失わない母を、恐れていたのかも知れません。

ところが母の目が、涙の膜に覆われた途端、わたくしは後悔致しました。最初の父に殴られても蹴られても、涙一つこぼさなかった母が、わたくしの言葉によって今にも泣こうとしているのです。わたくしはひよつとしたら、あの実父より、最低な人間なのでないかという気が致しました。

わたくしは即座に、「ごめんなさい」と謝ると

「こんなこと言うつもりじゃなかったの。今のはただの八つ当たりよ。忘れて」

と言つて、冷めかけたスープを飲みました。

そのスープには、春キャベツと新じゃがが刻まれ、表面にはパセリのみじん切りが振られておりました。そういえば母は、料理好きな人でした。今から二十年も前に自宅で人参のゼリーをこしらえ、夏場の来客用に、アイスコーヒーをキューブ状に、凍らせておくような人でした。

アイスキューブ状のコーヒーは、水から作った氷と違って、溶けてもアイスコーヒーを薄めないからです。うちに来た客は皆、人参ゼリーを絶賛し、アイスコーヒーに感嘆しました。それだけ食べ物を工夫することが好きだった人が、娘に毎週、塩むすびを食べさせなければならなかったとは、どれだけ苦痛だったことでしょうか。

分かっていたのです。当時、離婚は今ほど一般的ではありませんでした。子供への体罰にも世間はもつとおおらかでした。もちろんわたくしは、悪事を働いて父に殴られていた訳ではございません。しかし我慢強さというものは、未だに世間では、美德とされております。母もまた世間の価値観の被害者なのです。

わたくしが不機嫌な顔で、朝食を食べ始めると、母はスーツケースやらガイドブックやらに、ちらちら視線をくれました。母にとつては初の海外ですから、早めに支度をしたいのでしょう。けれどその行為がわたくしの機嫌を損ないそうで、気がかりなのでしょう。

自分の残酷さに甚だ嫌気が差したわたくしは

「とにかくさ、お母さんはお義父さんとアメリカ行つて」

と要請しました。自分のせいで、母がアメリカ行きを断念することになるのはごめんでした。これ以上、罪の呵責に苦しめられるのは勘弁でした。

「だって、一週間も家を空けるのよ」

「じゃあ一週間、わたしを一人にさせて。お母さんも分かっているでしょう。わたしはさっき、言い易い相手に不満をぶつけただけな

のよ。我慢強いお母さんなら、逆らわずにわたしのいちやもんを聞き入れるだろうとあたりをつけてね。最初の父親が、わたしたちにしてたことと、何にも変わらないわ。わたしはあの男のようにはなりたくないのよ。一人になって自省する時間を持たせて」

「分かったわ」と母は答えると、わたくしに背を向け、荷支度を始めました。その肩が、少し震えているような気が致しましたけれど、わたくしは早々に朝食を食べ終え自室に引き上げました。

ドアを閉め、わたくしはベッドにごろりと横たわりました。先ほどわたくしが、母に放った罵詈雑言の数々が回想されます。なるほど。そうだったのかと納得致しました。わたくしはどうやらずっと母を恨んでいたようです。だからこそこんな事態になるまで、実家に戻らなかつたのでしよう。

とはいえそれが分かつたからといって、何だというのでしよう。わたくしがあれほど、自分をぶつけたというのに、母はちよつと涙ぐんでみせただけで、心はもうアメリカに飛んでおります。母にとつては、乳飲み子を嫁ぎ先に取られ、追い出されたわたくしの心からの叫びより、初の海外の方が関心ごとなのです。

それにも関わらず、わたくしだけが、自分の母への思いに向き合うのは馬鹿馬鹿しく思えました。そんな手応えの無いことに、心を碎いている暇があつたら、もつと建設的になるべきです。わたくしは両親の海外旅行を、チャンスだと考えることに致しました。

両親がしばらく家を空けるなら、わたくしは遠慮なく、大浦さんのお宅に行けるからです。大浦さんを特に気に入った訳ではありませんが、大浦さんの五ヶ月のお嬢さんの存在が、わたくしの気にかかりました。我が子を失つた女というものは、代償行為として他の赤子を求めるものなのでしょうか。

一般論としては分かりません。ただわたくし個人に限っては、大浦さんのお嬢さんが気になりました。例えば三年付き合った男性に捨てられた日に、出会った男性に強引に迫られれば、ベッドインしてしまう女の心境と申し上げれば、ご理解頂けるでしょうか。

わたくしは胸が張っております。それを解消してくれるなら、手段は選ばないなどと、極端なことを、申し上げるつもりはございません。わたくしはただリラが恋しかったのです。

でもそれは、リラでなくてもよかったのかも知れません。わたくしはすぐさま、大浦さんにメールを打ち両親の渡米を告げ、その間大浦さんのお宅に通う旨を、付け加えたのですから。

その後母は、わたくしが彼女に悪態をついた件など、どこ吹く風と過ごしておりました。そして翌週、継父に付き従って静々とアメリカに出立致しました。それは母の優しさなのだと、解釈なさる方もいらつしやるでしょう。

わたくしもこれまででは、そう考えておりました。実父がとんでもない人だったため、母だけはまともな女なのだと、考えたがっていた節が、わたくしにはあつたからです。両親が共に異常者だと認めることは子供にとって辛いことです。だからわたくしは、実父だけを憎悪して生きて参りました。

しかしながらわたくしは母に、温かみというものを、感じた経験がありません。とはいえ考えてみれば、あんな異常な男と結婚した時点で、母も充分異常なのです。わたくしは今頃悟ったその事実を詮無いことだと考えました。

両親や夫と仲良くやることは、大抵の人にとって理想でしょう。けれど理想とは、必ずしも実現できるものではありません。わたくしは母に感情を吐露致しました。それなのに無視されたまま、母は逃避行でもするかのように、アメリカに旅立ちました。

放っておけば、いつの間にか、機嫌の直っていたわたくしの実父と、結婚生活を送っていた時代のようにです。母はことなかれ主義なのです。娘と向き合うより、面倒を避けて生きていたい人なのです。そんな人をどうやって本気にさせることができましょう。わたくしは母を諦めるべきなのです。

母に真剣に、自分と向き合ってもらおうとか、母に心から愛してもらおうなどと、無駄な努力をしている暇はありません。そんな時



間があるなら、今切実に、わたくしの乳房を求めている赤子の相手をした方が、充足感が得られ、胸のしこりとおさらばできるというものでしょう。

そんなことを考えながらわたくしは、自宅で一人、親指と人差し指と中指で、乳輪を掴みました。妊婦時代に切り抜いておいた『日本母乳の会』監修のスクラップ記事が、こんな形で役に立つとは思ってもいませんでした。乳輪を掴んだまま、前方に引き出したり乳輪全体を捻ったりという乳首の手入れのためのものです。

こうすることにより、乳首が柔らかくなって、赤ちゃんが飲み易くなるらしいのです。授乳間隔が空き、しこりのできた乳房と乳首では、いきなり五ヶ月のお嬢さんを宛がわれても、対応できないかも知れません。そこでわたくしは準備を始めたという訳です。

ただこの行為が、大浦さんのお嬢さんのためのものなのか、それとも自分のためなのか、わたくしにはよく分かりませんでした。しかしながらそんなことは、どうでもよいことです。大浦さんのお宅には、母乳を求める赤ん坊がいて、ここには胸のしこりに悩むわたくしがいる。世の中とは需要と供給です。

大浦さんのお嬢さんは、すなおちゃんという、名前だということでした。名づけたのは奥様だというお話です。奥様は一体どういふつもりで、そんな名前をつけたのでしょうか。世の中には素直と従順を、混同している輩が少なくありません。

もし奥様が、そんな方だったとしたら、言葉に対して真面目な大浦さんと破局したのは、やむを得ないことに感じられました。また仮に奥様が、「すなお」という言葉を、本来の意味で用いたとしても、皮肉なことに思えました。

奥様に新しく、男の方ができたのかどうかは存じません。ただ購入したばかりの住宅で、夫と乳児を抱えながら、離婚したいからという自分の気持ちに、実に素直に行動した母親に、「すなお」と名づけられたことを、彼女はいつの日か知るでしょう。

その時、すなおちゃんの心にどういふ影響が表れるのか、わたく

しには見当がつきません。大体その時までわたくしは、すなおちゃん  
の側に、いられる保証は無いのです。わたくしにできることとい  
ったら、今すなおちゃんに授乳してやることだけです。

初めてすなおちゃんと対面した時、ベビー用の椅子に座らされて  
いた彼女は、わたくしの姿を見て黒目がちの瞳を丸くしました。そ  
して次の瞬間、言葉にならない声で、しきりにわたくしに話しかけ  
てきました。わたくしはその様子を気に入りました。

他人の赤子であれ、犬猫であれ、懐いてくる小さな生き物という  
ものは愛らしいものです。しかしわたくしは、リラを愛しく思い返  
しました。リラの方が二ヶ月出生が遅かったため、単純に小さな生  
き物を愛しんだのか、あるいは実母の欲目だったのかは分かりませ  
ん。

ただすなおちゃんの体からは、確かにリラの体臭と同じ、ライラ  
ックの香りが発散されていました。赤ん坊というものは、漏れなく  
ライラックの香りが、するものなのでしょう。あるいはそれは女  
児に限るのでしょうか。

もしくはわたくしは、リラへの思慕によって、すなおちゃんの体  
臭から、リラの体臭に通じるものを、嗅ぎ分けただけなのでしょう  
か。

皆様にはこういった経験は、おありではないでしょうか。好きで  
付き合い始めた男性だったのに、いざ近づいてみると、相手の体臭  
が、気に食わなかったということが。それでも付き合い続けている  
内に、いつしかその体臭の虜になるといったことが。

最初はリラの方が可愛いと思っていたわたくしですが、大浦家に  
通う内、いつしかすなおちゃんを可愛く思い始めました。実母に捨  
てられたことを知らぬまま、小さな口を大きく開いて、上手にわた  
くしの乳房に吸い付く赤ん坊を見ていたら、わたくしは満足し始め  
ました。

つまりわたくしは、すなおちゃんに乳をふくませている内に、す  
なおちゃんを憎からず感じ始めたのです。胸の張りが解消されたた

め、肉体的苦痛を解消してくれたすなおちゃんに、好意を抱き始めたのでしょうか。それともすなおちゃんは、リラの代償になったのでしょうか。

そうです。わたくしはたったの二三日で、早くもリラのことを忘れ始めていたのです。それに気付いた時、わたくしは愕然と致しました。その一方でこれは便利なことだとも考えました。実母だからといって、どうしてリラのことを、第一に考えねばならないのでしょうか。

だとしたらすなおちゃんの実母が、すなおちゃんを捨てなければよかったです。血の繋がらない子供を気にかける方が、わたくしは真の愛だと考えます。血縁者を愛するなどただのエゴです。犯罪者だって実子虐待者以外は、基本的に血族には、便宜を図るじゃありませんか。犯罪者と同じことをして何が愛ですか。

ゆきずりの人間に優しくしてこそ、それが本当の、見返りを求めない真実の愛だと、わたくしは考えます。ああそれなのにわたくしは、すなおちゃんを可愛く思えば思うほど、リラに対して申し訳ない思いでいっぱいでした。実母という存在は、当人にとって世界に一人しかいないからです。

その実母は、生後三ヶ月でリラの元を離れました。それから半月もしない内に、よその赤子に乳を与え始めました。そして代償行為により満足しようとしているのです。まだ小さな、何も分からないリラ。ああそれでもリラは、毎日必ずお乳をくれていたわたくしという女を、まだ記憶しているかも知れません。

「親の心子知らず」などと申しますが、昨今の児童虐待のニュースを聞くまでもなく、歴史を紐解けば、実子にむごい仕打ちをした親の話は事欠きません。それにも関わらず、幼い子供の親を想う気持ちは、ほぼ例外無く強いものです。狭い世界を生きる子供にとつて、親は絶対神も同然の存在になり得るのです。

絶対神に忘れられた子の誇りなど、かくも無残に碎かれることでしょう。ひょっとしたらその子は、生き続けることすら放棄するか

も知れません。

すなおちゃんに情愛を感じるほどに、わたくしは彼女を、嫌悪するようになりました。見返りの無い他人の赤子を愛してこそ、真実の愛と思いつつ、彼女への愛が、わたくしのリラへの記憶を損なうようでやりきれませんでした。血縁など関係無く、人を愛したいと望んでおりましたのに。

とはいえ血縁者に、しかも自分の親に愛されない子供は、不幸だと思います。実父にも実母にも愛されなかったわたくしは、それを嫌というほど実感しているからです。すなおちゃんもまた、実母に捨てられた気の毒な子なのです。

それなのに、ある夕暮れ時、黄昏泣きをするすなおちゃんに添い乳をしながら、わたくしは適当な節を付けて、こんな歌を聴かせました。

ねんねんころりよ。木の梢。

風が吹いたら、揺りかご揺れる。

枝が折れたら、揺りかご落ちる。

赤ちゃん揺りかご何もかも。

心当たりのある方も、いらっしやいましょう。作者不詳のマザーグースの歌です。リラに対してだったら我が子に対してだったら、決してこんな歌を、口ずさんだりは致しません。他人の赤子相手だからこそ、こんな残酷な歌が歌える。自分に懐いている赤子に対してでもこんな歌が歌えるわたくしは、最低な女です。

その子守唄を聴きながら、眠りについたすなおちゃんを眺めました。震えがわたくしを襲いました。リラが今、どのような扱いを受けているのかと気に病みながら、他人の赤子に、このような残酷な歌を聴かせるわたくしは鬼です。

わたくしはすなおちゃんを、可哀想に思った訳ではなく、ただ自分の残虐性におびえて、歯をかちかちと鳴らしました。その時いつ

の間にか、大浦さんがわたくしの背後に立っていました。

これまでは、わたくしが授乳している際は、遠慮して部屋を出ていた大浦さんです。それなのにその時はなぜか、わたくしの真後ろに位置していました。

胸を露にしていたわたくしの右手首を掴むと、大浦さんはわたくしを、引っ張り上げるように起こし、立ち上がるようにと促しました。わたくしが立ち上がるとわたくしの右手首を掴んだまま、大浦さんは奥様と使っていただろう寝室に向かって、歩き始めました。

今しがた、わたくしの唇から漏れた埋伏の毒が、わたくしにやましさを覚えさせたのでしょうか。ライラックの花に、乳を振り掛けている際に目撃された恐怖と、その夜に再び向かった庭で、大浦さんに見つかり、右手首を掴まれた時の記憶が絡み合って、わたくしの脳裏で爆発しました。

大浦さんのお宅に通い始めて四日、わたくしは大浦さんとの力関係を、逆転できておりませんでした。それはこちらのお宅に通い始めてから、わたくしはすなおちゃんのことばかり、意識していたからです。

頼まれたのは授乳だけでしたが、乳をやっていたら、情が移ります。わたくしは授乳以外にも、おむつを替えてやったり遊んでやったりと、すなおちゃんの相手をしておりました。

そしてすなおちゃんが眠れば、わたくしも隣家住まいであることをよいことに、自宅に帰って洗濯をしたり掃除をしたりと、雑用をこなしておりました。たまたま大浦さんが、GW中で在宅していらしたため、わたくしは日に何度もすなおちゃんの相手をしつつも、すなおちゃんが眠りさえすれば、その場を立ち去っていたのです。

そのため、大浦さんのお宅に日に何度も通いつつ、大浦さん本人とは、案外会話を交わしておりませんでした。ですから最初に形成された力関係が、そのままだったのです。

気が付くとわたくしは、布団の上で、大浦さんに押し倒されておりました。何やら自然な気が致しました。わたくしはすなおちゃん

に、母乳を与えている身です。ならばすなおちゃんの父親に抱かれても、当然のような気が致しました。

それでもここ数年は、邦彦以外に、体を許したことの無いわたくしです。しかも出産後初の営みです。戸惑いも覚えませんでした。それなのにわたくしの戸惑いなど、そこに存在しないかのように、大浦さんはわたくしを、ひんむいてゆくのです。

赤子を残され、奥様に去られ、大浦さんは自暴自棄になっていらつしゃるのだと、理解して差し上げなければならぬ。わたくしは当初そう考えておりました。ですが事が進むにつれ、寛容な心は自己中心的な思いに変わりました。わたくしは大浦さんに、好意をほめかされた記憶が無いのです。

お互いバツイチ同士なのですから、わたくしたちがくつついてしまっても、何の問題も無いはずです。それなのに大浦さんは、わたくしに決して、誤解を与えるようなセリフ、もしくは期待を持たせるようなセリフを吐きませんでした。

おそらく大浦さんは、他人の庭のライラックの花に、母乳を振りかけるような変人などと、まともな付き合いを、する気は無いのでしょう。わたくしは大浦さんにとって、ただの娘の乳母。そして気が向いた時に、肉欲を解消する手頃な相手なのです。

そう気付いた時、わたくしは気分が高揚致しました。自分を確実に愛していない相手に抱かれるということは、何とすらぶれた幸福を与えてくれるのでしよう。実父に愛されず実母にも愛されず、継父にも本当に愛されているのかは、分からないわたくしです。

そんな状況から脱却し、ようやく自分を愛してくれたと錯覚した夫には、体内に愛の結晶が宿った途端に浮気をされました。そのような経験をすると、人は見せかけの優しさに、自ら進んで騙されようとするようになるのかも知れないと、わたくしはふと気付きました。

邦彦の愛人も、ひよっとしたら、今のわたくしと同じような感慨を、抱いていたのかも知れません。堕ちていく喜びとでも、表現す

ればよろしいでしょうか。水は低きに流れるものです。

当初はわたくしとの離婚を考えていなかった邦彦と、交わっていた愛人。おそらく何の約束ももらっていないかったでしょう。彼女に對し親近感が湧きました。

初めての男の前に裸体を晒しながら、他の一对の男女について、考え始めたわたくしの、注意を喚起させるかのように、大浦さんがわたくしの体を探ります。性感帯を求めて探ります。そう易々と教えてやるものかという思いが、いつの間にかゆるく溶け始めます。わたくしは耳をぱくりと口にふくまれ、思わず悶絶致します。

身体的な快楽を与えてくれる人は、なぜかわたくしを、想ってくれているような気がするから不思議です。胸の張りを解消してくれ、すなおちゃんしかり、わたくしの体を愛撫する大浦さんしかりです。今、大浦さんの熱い舌はわたくしの首筋を落下していききました。その舌がわたくしの乳房に到達するのは時間の問題でしょう。

実の娘が吸いついた、わたくしの乳首を舌で転がしながら、大浦さんはどういった感慨を持つのでしょうか。男の方にとっては、そんなことはたいした問題では無いのでしょうか。ええ、わたくしがすなおちゃんの実母なら、たいした問題では無いでしょう。

わたくしがすなおちゃんの実母なら、わたくしはあくまで、大浦さんのものであって、すなおちゃんは後から、登場した存在ということになります。でも今回は違います。わたくしはあくまですなおちゃんのために借り出された乳母です。その乳母を大浦さんは、自分の慰みものにしてしようとしているのです。

けれどそんなことに、何の問題があるでしょう。先ほど大浦さんの右手が、わたくしの左の乳房を掴みました。そして大浦さんの唇が、わたくしの右の乳首に吸い付きました。すなおちゃんのためにと、乳輪を掴み引つ張って柔らかくしたはずの乳首は今、呆気無いほど硬く屹立しております。

家中に漂うライラックの香りは最早、わたくしにリラを想起させません。わたくしの鼻はこの香りに慣れてしまいました。そのくせ

わたくしは、未だにリラと邦彦を恋しく思います。それでいてわたくしの血潮は今、妖しく泡立っております。



(後書き)

こういった書き方をしたのは初めてなので、読者の皆さまの反応が気になります。

よろしければ感想をお聞かせ下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5574t/>

---

ご近所付き合い

2011年5月26日00時55分発行